

伯父さん

清水葵衣

私には優しい伯父さんがいて、彼はパン屋だった

彼はいつも小麦の匂いがした

ある日私が焼きそばを作っているとき、彼は脳の血管を詰まらせて

そのまま死んだ

死んでしまってもすぐにはさよならじゃないと

そのとき学んだ

伯父さんが死んだ次の晩、彼の幼い息子がうちに来て、

彼が死んだ日に食べなかった私の焼きそばと一緒に食べた

なんでもかんでも入れる我が家の焼きそばには、

彼の息子が苦手なシメジが入っていたけれど、

ゆっくり食べてくれた

静かな夜だった

伯父さんの妻は少し太っていて、朗らかな人だった

彼女は金の亡者だった

伯父さんが死んだら家をさっさと売って、彼の幼い息子を連れて

どこか遠くに行ってしまった

遺産相続がどうにもうまくいかなくて

弁護士を介してしか話さなくなった

壁

壁

一昨日伯父さんの妻を駅で見かけた

知らない人のような彼女

他人になるまではあつという間

嘘になるのもあつという間

彼女はあの世で伯父さんと再会したら何を話すのだろうか

私たちとは弁護士を介して話すのだろうか

私は伯父さんの顔をまっすぐ見れるだろうか

伯父さん、

どうしてその人と結婚したの